# 2019年度 活動報告書

Annual Report 2019

一般社団法人
エンドオブライフ・ケア協会
End-of-Life Care Association of Japan

〒105-0001 東京都港区虎ノ門三丁目17番1号 TOKYU REIT 虎ノ門ビル6階
TEL 03-6435-6404 / FAX 03-6735-4579
E-Mail info@endoflifecare.or.jp
https://endoflifecare.or.jp/

# 私たちが大切にしていること

## だれもが「生きてきてよかった」と思えるように
## 自分の人生に誇りを持てる最期を迎えられるように

日本は超高齢化社会を迎え、少ない生産年齢人口で多くの高齢者を支える時代に直面しています。社会資源が偏在し、地域におけるつながりが希薄化するなか、人知れず苦しむ人はますます増えていくことでしょう。したがって、従来の社会保障制度で解決できることには限界があります。↗

特に、人生の最終段階を迎えた人やその家族の苦しみを前に、これまで様々な施策が行われてきたものの、抜本的な解決には至っていないのが現状です。この先、病院で最期まで過ごすことは難しくなり、自宅や介護施設での暮らしが求められていきます。実際、それを望む人は増えていますが、環境や資源などの理由から、すべての希望が叶うわけではありません。親の介護と仕事の両立に悩む働く世代や、一人暮らしで地域とのつながりが弱く、孤独や不安を抱える人も増えていくことが予想されます。

一方、その人たちの苦しみは、地域の人からはなかなか見えません。さらにこの問題をいっそう困難にしていることは、たとえ苦しんでいる人に気づいたとしても、「みんなに迷惑をかけたくない」「自分なんて誰にも必要とされていない」「誰にもわかってもらえない」と悩み苦しんでいる人を前に、どのように関わってよいのかわからず、足が遠のく人が少なくないということです。

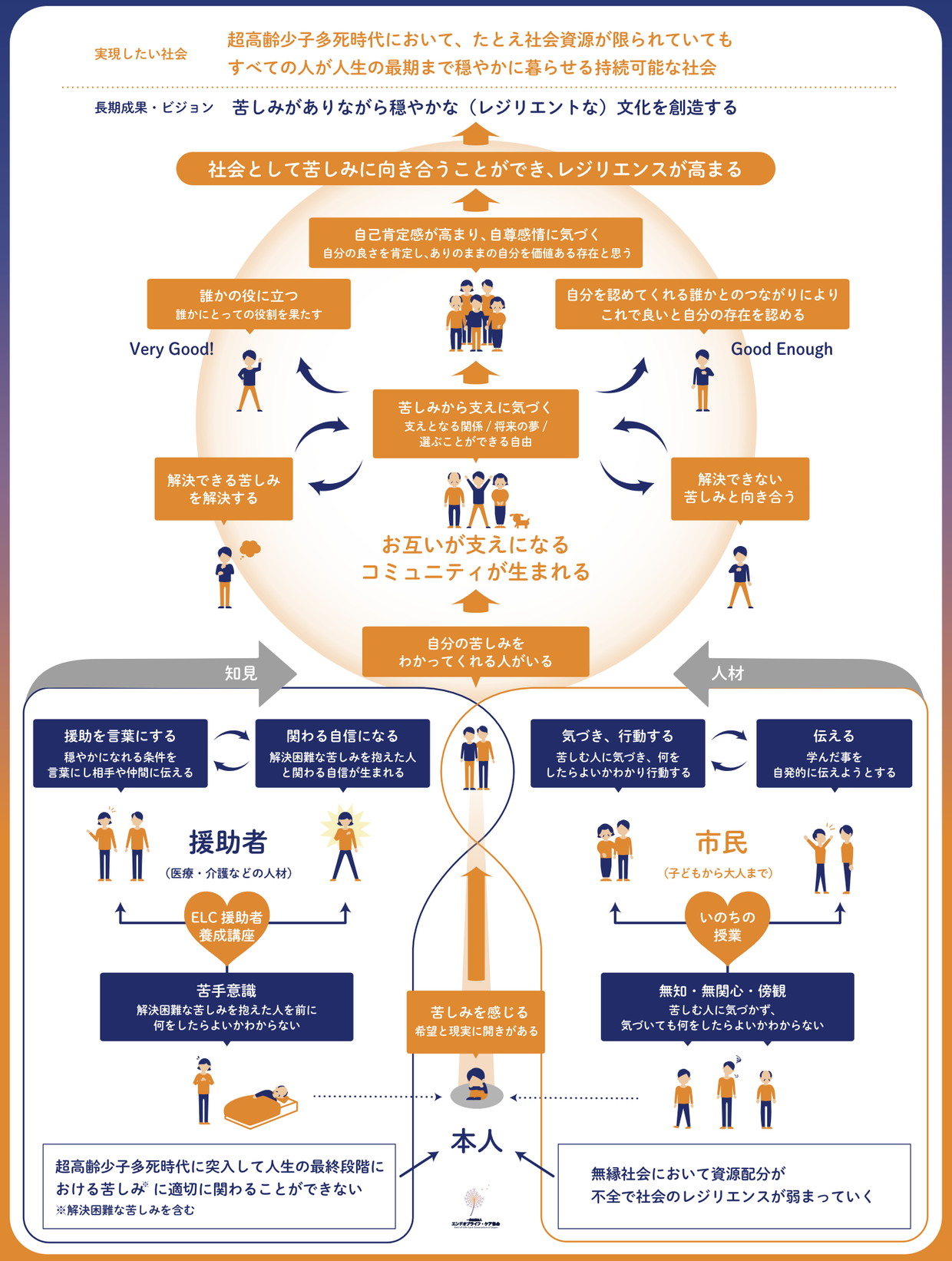
## 自分の苦しみをわかってくれる人がいるとき、
## たとえ死を前にしても、人は穏やかになれる

エンドオブライフ・ケア協会は、ホスピス・緩和ケアで培ってきた対人援助の手法に基づき、人材育成に取り組んできました。看取りの現場で学んできたことは、「なんで自分だけ」「私の気持ち、誰にもわからない」と絶望や孤独を感じていた人が、たった一人でも、自分の苦しみをわかってくれる人の存在により世の中が違って見える可能性があること、そしてその苦しみから自分の支えに気づいたとき、たとえ苦しみは残り続けたとしても、穏やかさを取り戻す可能性があるということです。そのために「話を聴く」ということを大切にします。

苦しみを抱えていても穏やかでいられる理由は人によって異なります。私たちが大切にしているのは、数値だけではなく、顔の表情です。苦しみを抱えた本人とその家族にとって、どんなことがあると穏やかになれるのか、その条件（＝支え）を本人との対話を通して探ります。そして、見出した支えを強めるために、誰が何をするとよいのか、難しい専門用語ではなく、また、抽象的な言葉ではなく、関わるすべての人にとって**わかりやすく具体的な言葉**にします（**“援助を言葉にする”**）。

たとえ解決が困難な苦しみを抱えた人を前にしても、医療や介護の専門職だけではなく、家族や友人、近隣の住人も含めて、苦しんでいる人の力になりたいと願うすべての人にできることがあります。職種や立場を越えて、誰もが自分にできることがあることを知り、実践していくなかで、苦しむ人と関わることへの苦手意識を持っていた人も関わる自信を持てるように変わっていきます。

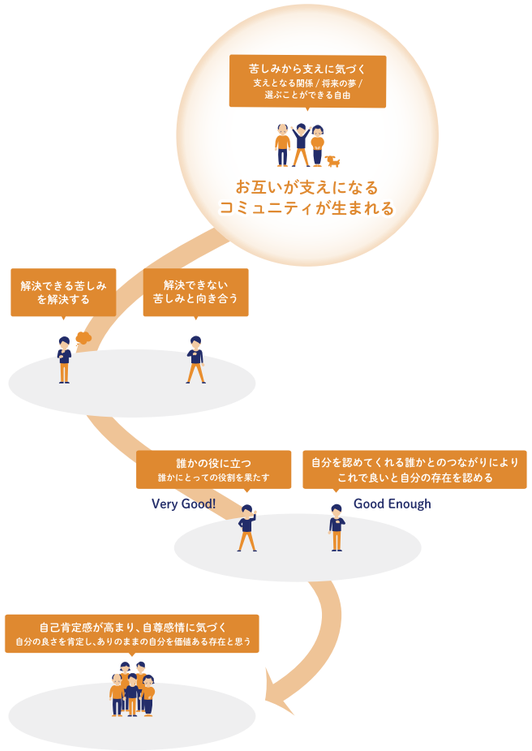
# Theory of Change
セオリー・オブ・チェンジ



## 子どもから高齢者まで、
## 解決が困難な苦しみがありながら穏やかに生きていく

解決が困難な苦しみを抱えているのは、人生の最終段階を迎えた人だけではありません。子どもから高齢者まで、それと気づかずとも誰もが“苦しみ”を抱えています。看取りの現場における対人援助からの学びは、そのまま「折れない心を育てるいのちの授業」として、学校、地域、企業などで紹介してきました。大人も、子どもも、いのちの授業で学んだ人は、これから出会う困難や苦しみと向き合うことができるでしょう。

また、自分の苦しみと向き合うだけではなく、周囲で苦しむ人に気づき、関わることができるようになり、さらには苦しみを通して学んだことを、周囲へ自発的に伝えていくことで地域に優しさが連鎖していくことを期待します。




## お互いが支えになる
## コミュニティを通して学びあう

苦しんでいる人は、自分の苦しみをわかってくれる（と自分が感じる）相手がいるだけで、心が落ち着き、世の中が違って見えてきます。それは、苦しみを抱えた本人・家族に限らず、その苦しみと関わろうとする人にも同じことが言えます。

対人援助とは、特定の立場や役割の人が一方的に提供するものではありません。あるときは誰かを気にかけ、あるときは誰かから気にかけてもらう。相互の関わりを通して学びあう。私たちがめざしているのは、一方通行ではなく、お互いが支えになるコミュニティです。

苦しみに気づき、自分に何ができるか考え行動し、誰かの力になることは、自己肯定感を育みます。しかし一方で、役に立てない、何もできない、そんな自分をふがいなく思うこともあるかもしれません。たとえ解決が困難な苦しみに遭遇したとしても、それまで気づかなかった大切な自分の支えに気づくとき、自分自身の存在をこれでよいと認め、自分を大切に思い、自分の苦しみとも向き合う可能性がひらけます。

## 持続可能な共生社会を創る

私たちは、このような関わりができる人を社会に増やしていく活動を行っています。一部の専門家だけではなく、子どもから高齢者まで、すべての人が、生きるすべとして学び続ける。また、その連鎖が地域に広がり、しなやかで持続可能なまちをつくる。

このような社会を、志を同じくする活動団体と共に実現することを願っています。

実現したい社会　超高齢少子多死時代において、たとえ社会資源が限られていてもすべての人が人生の最期まで穏やかに暮らせる持続可能な社会

長期成果・ビジョン　苦しみがありながら穏やかな（レジリエントな）文化を創造する

社会として苦しみに向き合うことができ、レジリエンスが高まる



## セオリー・オブ・チェンジ

セオリー・オブ・チェンジとは本質的には、ある特定の文脈において、どうやって、なぜ、望ましい変化が起こることが期待されるかについての包括的な説明とそれを図示したものです（出典：米国Center for Theory of Change）。当協会のセオリー・オブ・チェンジは、一般社団法人セオリー・オブ・チェンジ・ジャパン様のご指導をいただきながら作成したものを一般社団法人日本医療デザインセンター様にデザインしていただきました。　この活動報告書は、そのセオリー・オブ・チェンジをもとに、めざす社会とそこに至る道筋、そして現在までの成果を描くことを試みました。めざす社会に向けて、課題は山積みですが、今後も志同じくする方々と連携しながら、歩みを続けて参ります。

ELC協会の小澤先生、千田さんと、2017年の12月からセオリー・オブ・チェンジ（ToC）づくりをご一緒しています田辺と申します。「人生の最終段階」という大自然の営みの前に、一人の人間はほぼ無力と私自身、介護現場で感じております。「100%できない自分がいても、穏やかに」との小澤先生と千田さんの言葉は、日々心に響き支えになっております。ELC協会は、日本社会に不可欠な知的インフラと確信します。

**一般社団法人**
**セオリー・オブ・チェンジ・ジャパン**
**田辺 大 様**

### ◆医療・介護関係者の皆さま

多死時代を前にして、地域での看取りに対する苦手意識や負担感を感じている医療・介護関係者は少なくありません。看取りに関わる様々な立場の人が一同に会して学び、地域での対応力が向上することにより、患者・家族にとって満足度の高い地域ケアが提供できるようになることが期待されると同時に、医療・介護従事者の幸せにつながることを願っています。

人生の最終段階、そして旅立ちは、私たちの避けられない宿命です。この事実を変えることはできません。変えることができるのは、それをどう受け止めるのか、という私たち自身の受け止め方だけです。それは「人はなぜ生きるのか」という根源的な問いにつながっているように思います。私たち一人ひとりが、対話を通じて、その問いに向き合い、考え続けるために。支える側、支えられる側を超えた学び合いの場が存在することは、とても重要なことだと思います。

**医療法人社団悠翔会 理事長・診療部長**
**佐々木 淳 様**

### ◆市民活動団体・地域で活動している皆さま

人口動態の変化から、これから地域ではさらに苦しむ人が増えていくことが予想されます。1つの団体で解決できることには限りがあるかもしれません。そこで、相互交流しながら、安心して過ごせる社会をめざしてつながっていきたいと思います。お互いのよいところを共有しながら、活動の輪が広がり、情報交換や相互交流がありますようにと願っております。

2017年にJWLIに参加してくださってから、早3年が経ちました。その間、ELCも非常に発展され、多くの人材を育てられ、「穏やかな最期の迎え方」を世の中に広く伝えられている事をとても嬉しく思います。なお今の様に、世界中がCOVID19の恐怖にさらされ、心配な毎日を過ごす人々にとって、ELCのビジョンと活動は、今の世の中に一番必要、不可欠だと思います。その活動のインパクトを強化するには、医療関係者をはじめ、自治体、地域のコミュニティー、起業経営者、教育関係者そして個人が問題意識を共有し、解決の為に手を結び、協力しながら活動していく事が必要とされていると思います。コロナウィルスの様に見えない敵と戦うには、死を迎える事も全く同じだと思いますが、一個人や一団体だけでは戦えません。今こそ全てのセクターが手を取りあい、協力して立ち上がる時です。どうか、ELCがその協力のリーダーシップを取ってください。

"It is the time for you to take the leadership and I know you can do it. Good luck."

**JWLI プログラム創設者、フィッシュ財団創設者**
**厚子・東光・フィッシュ 様**
**※ JWLI：Japanese Women's Leadership Initiative**

### ◆子どものための活動に取り組む皆さま

「いのちの授業」は、いのちの大切さを頭で理解するためのものではありません。

決して平坦ではない人生を歩む私たち一人ひとりが、解決困難な苦しみを抱えたときに何ができるか、それぞれの立場で感じ、考える授業です。道徳教育やがん教育の一環としてご紹介可能です。

いのちの授業を受けた子供たちは、改めて周りに支えられている自分に気付きます。

どの子も本来持っている優しさの芽を伸ばし、「聴いてあげたい」「助けてあげたい」「反復を教えてあげたい」など行動への思いを高めます。そして自分の存在に確信と安心を手にします。

子供たちも親御さんたちも一生懸命に生活しています。でも時には辛いポケットに落ち込んでしまうことがあります。

誰かに助けを求めやすい学校、誰かがそっと気付き側にいてあげる学校、いのちの授業を通して、「支え合う社会」を目指す ELC 協会に心から共感し応援します。

**船橋市立習志野台第二小学校**
**スクールカウンセラー**
**小松 良子 様**

「痛みや苦痛を和らげるだけではなく、生きていて良かったと思えるような援助」この協会の意義に私も賛同いたします。

私が出会う、病気や虐待、いじめや不登校などの喪失による傷つきを抱えた子どもたちに対するこのような援助を「全ての人が行える」ようにする。そのための活動をこれからも応援していきたいと考えております。

**昭和大学大学院**
**保健医療学研究科准教授**
**副島 賢和 o(´・●・`)o 様**

# 事業概要

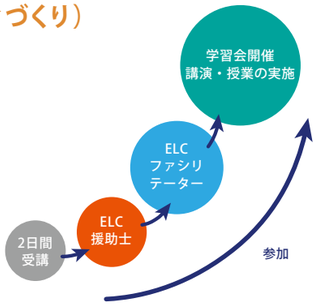
## 地域での学習会開催支援（コミュニティづくり）

看取りの現場は正解がありません。援助者は、苦しむ人の力になりたい想いが強ければ強いほど、思うように本人や家族を援助できないとき、その開きに苦しみ、一人で抱え、バーンアウトしがちです。

そこで、誰かと共に振り返り、できたこと、できなかったことを言葉にすることで、次によりよいケアを提供しうる可能性がひらけます。

当協会はエンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座を実施し、受講者の中から、ファシリテーターを認定して、それぞれの地域で苦しむ人に関わる人のための継続学習会を開催する支援を行っています。学習会は、日々現場で「あの関わり方でよかったのだろうか」と悩む個人がつながり、実践を振り返るコミュニティとなっています。

法人内や地域でこのような場があることは、「支えようとする人の支え」としても機能しています。

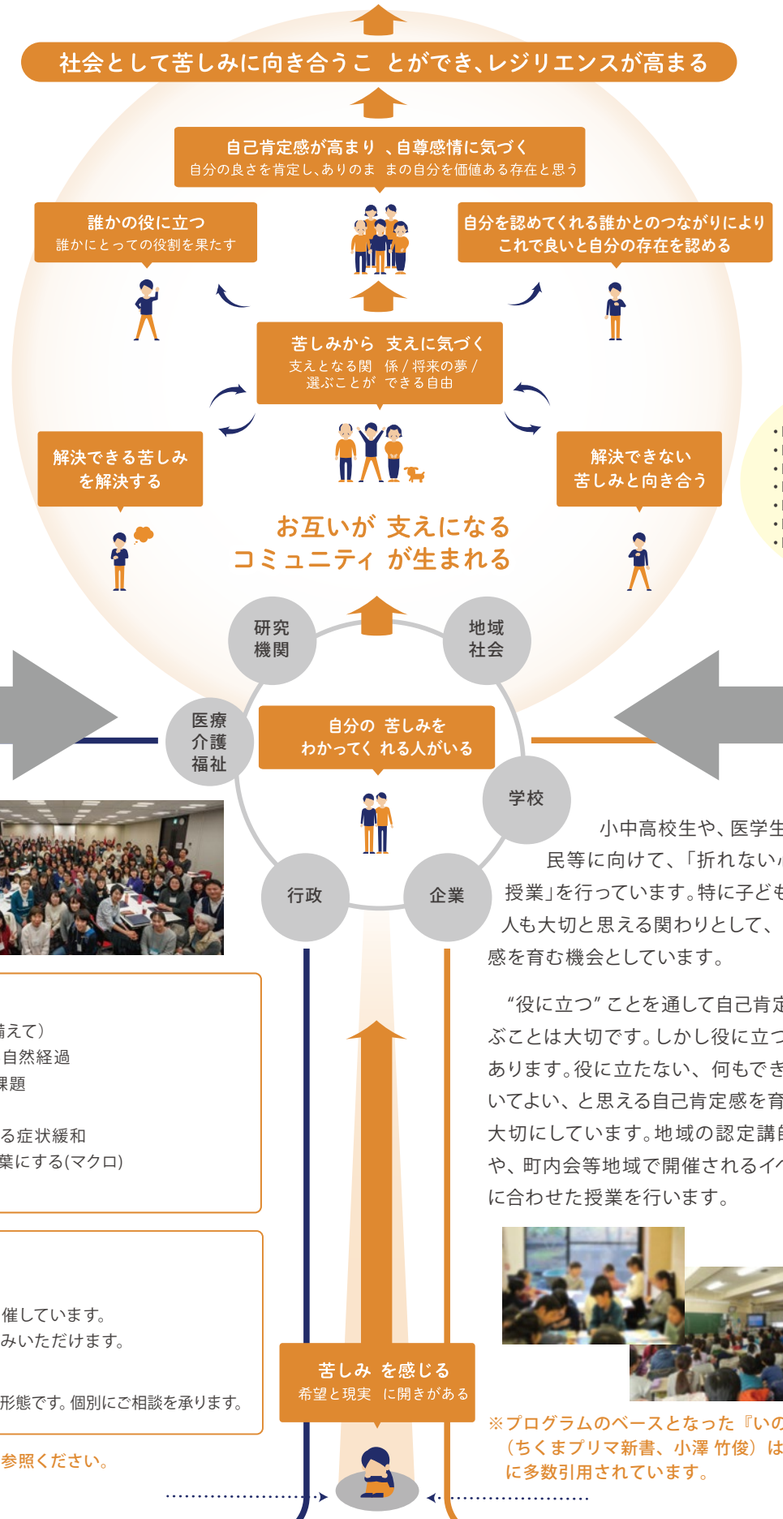



養成講座受講済みの方々を対象とした復習の位置づけとして開催するほか、未受講の方々も気軽にご参加いただけるように施設に出前講座として伺うこともあります。また、どのように始めてよいかわからない地域のために学習会の立ち上げ支援も行っています。

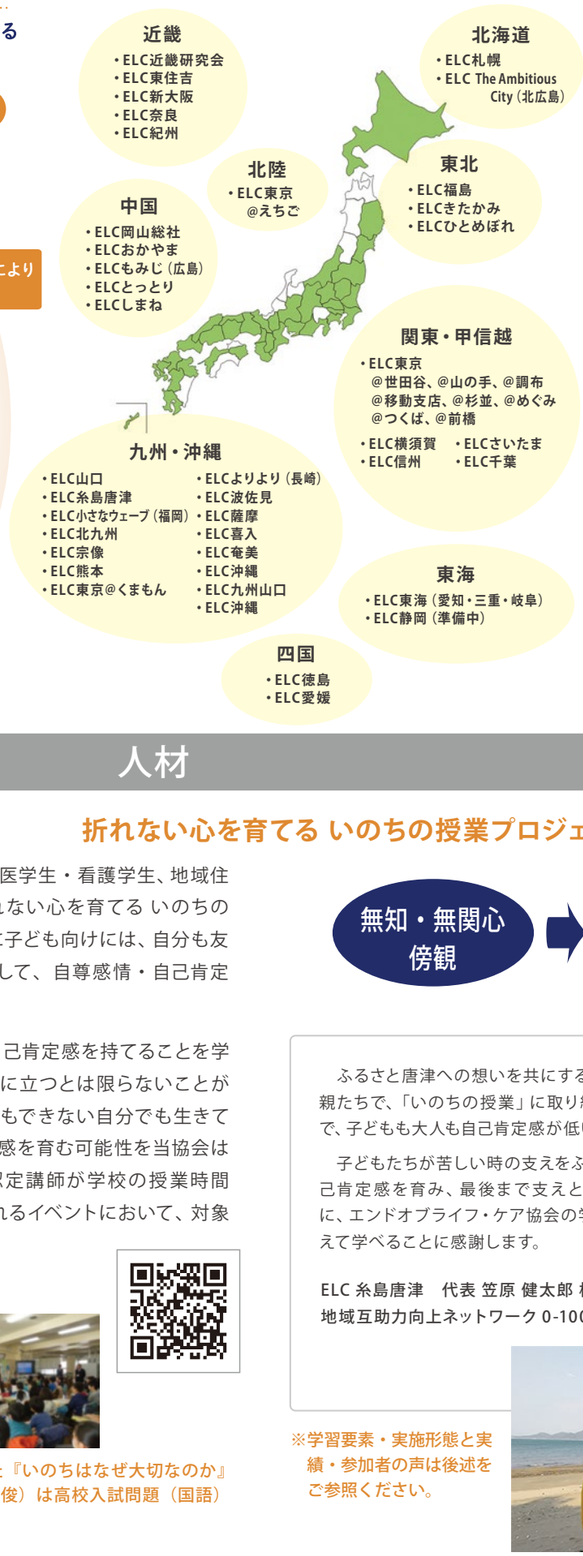
2019 年度からは、「折れない心を育てる いのちの授業」講師養成が始まり、認定講師となった方が、地域学習会のなかで、子どもたちなどに向けて実施することもあります。

実現したい社会　超高齢少子多死時代にお　いて、たとえ社会資源が限られていても
すべての人が人生の最期　まで穏やかに暮らせる持続可能な社会

長期成果・ビジョン　苦しみがありながら穏や　かな（レジリエントな）文化を創造する




■：ELCファシリテーターが所在する地域




**◆ELC東京**

ELC東京は援助者養成基礎講座を受講された方を対象に年4回学習会を開催しています。

私たちは「同じ想いを共有できる仲間が集まり継続的に楽しく学べる場」としての学習会を創るため、毎回新しいプログラムの工夫やおもてなしの心を大切にしてきました。参加者は関東だけでなく遠方からもお集まり頂いています。

また、基礎講座未受講者も対象とした出張授業や講演、遠方の地域との合同学習会などの取り組みも始めています。

ELC 東京 代表　坂下 美彦 様

▲ELC 東京ファシリテーターの仲間

## 知見

### エンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座（援助者に向けて）

苦手意識 ➡ 関わる自信

人生の最終段階にある人やその家族と関わることを苦手と感じる人は少なくありません。日に日に食事が少なくなり、やがて寝ついていく人と、どのように関わってよいかわからない援助者が、自信を持って支援にあたれるようになることを目的として、“エンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座”を2日間の研修として全国で開催しています。

解決が困難な苦しみを抱えた人に接しても、“援助を言葉にする”ことで、一部のエキスパートに限らず、一人ひとりが自信を持って関わることができるようになり、本人や家族の穏やかな最期を支援できるようになることを目指します。

人生の最終段階に共通する自然経過、意思決定支援、スピリチュアルペインに対するケアについて、1対1での対応方法から多職種連携で行う支援方法までを学びます。

当協会が主催し、募集・運営を行う形式と、各地域が主催する形式があります。主催することをご希望の際にはご相談ください。

**◆学習要素**

- 課題背景（2025年問題に備えて）
- 人生の最終段階に共通する自然経過
- 苦しむ人への援助と5つの課題
- 意思決定支援
- 自宅、介護施設で求められる症状緩和
- 多職種連携で「援助」を言葉にする(マクロ)
- 1対1で対応する(ミクロ)

**◆実施形態**

- 公開講座
  当協会が主催し、全国で開催しています。
  個人でも法人でもお申し込みいただけます。
- インハウス研修
  行政や職能団体等が主催する形態です。個別にご相談を承ります。

※実績・参加者の声は後述をご参照ください。

## 人材

### 折れない心を育てる いのちの授業プロジェクト（市民に向けて）

無知・無関心 傍観 ➡ 気づき、行動する

小中高校生や、医学生・看護学生、地域住民等に向けて、「折れない心を育てる いのちの授業」を行っています。特に子ども向けには、自分も友人も大切と思える関わりとして、自尊感情・自己肯定感を育む機会としています。

“役に立つ” ことを通して自己肯定感を持てることを学ぶことは大切です。しかし役に立つとは限らないことがあります。役に立たない、何もできない自分でも生きていてよい、と思える自己肯定感を育む可能性を当協会は大切にしています。地域の認定講師が学校の授業時間や、町内会等地域で開催されるイベントにおいて、対象に合わせた授業を行います。

※プログラムのベースとなった『いのちはなぜ大切なのか』（ちくまプリマ新書、小澤 竹俊）は高校入試問題（国語）に多数引用されています。

ふるさと唐津への想いを共にする医療介護関係者と育児中の母親たちで、「いのちの授業」に取り組んでいます。地域活動する中で、子どもも大人も自己肯定感が低いことに気づかされます。

子どもたちが苦しい時の支えをふるさとで感じ、関わる大人も自己肯定感を育み、最後まで支えと感じあえる地域を育てるために、エンドオブライフ・ケア協会の学びは欠かせません。世代を超えて学べることに感謝します。

ELC 糸島唐津　代表 笠原 健太郎 様
地域互助力向上ネットワーク 0-100 地域の輪　代表 中島 直子 様

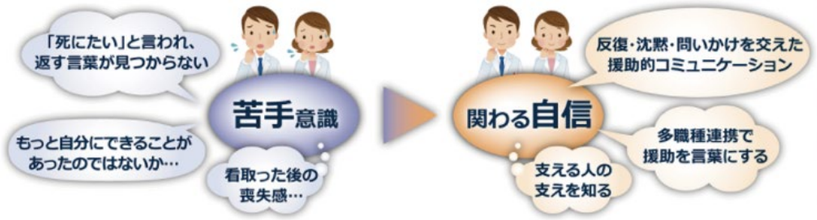
※学習要素・実施形態と実績・参加者の声は後述をご参照ください。

## 人生の最終段階に関わる人材の育成

## 「いのちの授業」を通したまちづくり

# 援助者（医療・介護などの人材）に向けて

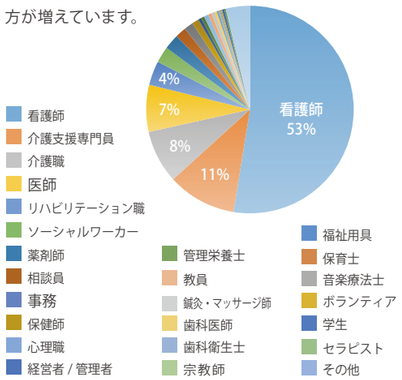
## 人生の最終段階（エンドオブライフ）に自信を持って関わるために




### ◆エンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座

**◆参加者職種**

受講者のおよそ半数が看護師（病院、在宅、施設等含む）、およそ2割が介護関係者（ヘルパー、介護支援専門員、管理者等）です。その他職種には、民生委員、会社員、コーチ、医療関係事務などを含みます。親の介護や企業のCSRを目的としてご参加くださる方が増えています。




**◆参加者の声**

- 総論は今まで色々なものを聞いてきましたが、ここまで細かな各論は、初めてで自分なりにかみ砕いて自分の技術にしていけたらと思いました。
- 患者の伝えたいことと私が聞きたいことは違う。今まで、聞いて答えた内容だけをみて、患者を理解したつもりだった。
- ともすればスキルで押し通してしまう意思決定支援を、今回の受講により患者さん、そのご家族を支えるマインドを学ぶことで、より人間的な支援が出来る。
- 援助という抽象的になりやすい表現を、専門用語を使わずに言葉にしつづけること。また、それを広めていくことの必要性を学びました。
- 今回の研修で学んだことだけが答えだったり、正解だったりするわけではなく、現場から学ぶことが一番大きい。そこで学んでいきたいと思います。
- 多職種や他地域でご活躍されている方に出会えモチベーションが上がり刺激になった。
- 人生の最終段階に限らず、生きにくさを抱えた人、子ども、全ての人に共通するものがエンドオブライフ・ケアの中にみえた。
- 一般の人や介護職も人生の最終段階に苦しむ人の支えになれると確信。

その他、開催ごとの感想や、実践レポートは以下をご参照ください。
https://endoflifecare.or.jp/category/course_report/

### ◆ディグニティセラピー実践ワークショップ

エンドオブライフにおいては、人は様々な形で、自分自身の“尊厳”を失っていきます。今まで1人で買い物に行けていた人が、行けなくなったり、今まであたりまえにできていた入浴やお手洗いですら、できなくなったりします。自分が果たしてきた役割を失い、家族や他の人に迷惑をかけ、本当は自分でやりたいことを制限されてしまい、自尊心が崩れていきます。

エンドオブライフ・ケアでは、このような苦しみを抱えた人の尊厳を取り戻すことを意識します。どうすれば尊厳を取り戻すことができ、尊厳を守り、さらには、尊厳を維持していくことができるのでしょう。1つの可能性として、ディグニティセラピーを紹介します。カナダの精神科医であるチョチノフ医師によって考案された精神療法的アプローチです。

人生を振り返り、本人が誇りに思っていること、果たしてきた役割、学んで来たことなど、本人が大切にしてきたことや憶えていてほしいことを言葉にします。そして、その言葉は手紙などの形で、大切な人に受け継がれていきます。このディグニティセラピーのポイントを実践的に学ぶワークショップを開催しています。

**◆実施形態と実績**

公開講座としてエンドオブライフ・ケア協会が主催するもの、地域学習会をはじめとして、各主催者が開催するものがあります。

- 證大寺様　・ELC鹿児島/ビハーラ鹿児島様
- 沖縄赤十字病院様　他



# 働く世代（40～50代）に向けて

## 親のこれからと共に自身の働き方・生き方を考える

家族の介護が理由で離職する人は年間10万人、超高齢化が進むなか、ますますこの数が増えていくことが予想されます。後期高齢者の子ども世代にあたる40～50代働く世代といえば、企業にとっては管理職や事業開発担当など、組織運営上貴重な戦力である一方で、子育てや高齢となる親の介護など、これまでの仕事生活を継続することを難しくする可能性のあるライフイベントを経験する年代でもあります。遠くに住む親の介護と直面しながらも、いかに仕事と両立していくか、悩んでいる人は少なくありません。この問題に対応すべく、大企業は介護休暇・休業等の人事制度や、冊子の配付、社内セミナーの開催などに取り組んでいます。これらに加えて、親の介護に直面してから、あるいは、できれば元気なうちから、親の置かれた状況や大事にしていることを、折に触れて話し合いを重ねていくことが、親の尊厳を守ることにも後にその選択を支えることができたという家族の納得感にも、また限られた社会資源を守ることにもつながる可能性があると考え、セミナーを開催しています。

### ◆プロジェクトマネジメントで考える親の介護と仕事の両立

人生100年時代と言われるなか、私たちの働き方は大きく変わっていくことが予想されています。起こり得るイベントには、自分や家族の病気や怪我、そしてそのことがきっかけとなって、働きたいのに仕事を離れて介護をしなければならないと悩むこともあるかもしれません。

突然始まり、先が見えない中、決断の連続に難渋しがちな介護。初めて遭遇することばかりで次々と起こるできごとに翻弄される方は少なくありません。自分の親のことであれば子どもとして、いつか迎える親の最期をも見据えながら資源のバランスを取りながら、何をめざしていくのでしょうか。仕事と介護を両立することを一つのプロジェクトと捉え、いざ直面したときに備えます。

**◆学習要素**

- 介護のはじまり
- 目標　計画　資源
- 目標の設定と環境の整理
- 変化への対応
- 解決困難な苦しみを抱えた人とのコミュニケーション

**◆実施形態と実績**

各社からの依頼に基づき、講師が伺います。

- NTTドコモ様
- 三菱UFJリサーチ＆コンサルティング様
- ホワイト&ケース法律事務所、ブラックロック、ウェルズ・ファーゴ（3社共催）
- 日系IT会社、外資系金融会社 他

**◆参加者の声**

- 介護に目標なんてないと思っていた中でキーワードと気づきをいただきました。
- 苦しむ人への援助的コミュニケーションは介護に悩んでいる人だけでなくすべてのコミュニケーションに通じると感じた。
- 身近に介護されている方が多いことに驚きました。何かあったらまず周りに相談したい。

国際的な法律事務所であるホワイト＆ケースでは、異なる価値観を持つ人たちが多様性を認めて尊重し合いながら一人ひとりの能力を十分発揮することが革新につながるという組織共通の価値観を持っています。ダイバーシティ＆インクルージョンへの取り組みの一つとして、多くの人が当事者となりうる親の介護と最期に向き合うためのワークショップを実施していただきました。

仕事と介護の両立という重たい課題をプロジェクトとして捉えて備える考え方に触れる有意義な機会となりました。

**ホワイト＆ケース法律事務所**
**広報マネージャー 土田 美由紀 様**

### ◆Death Over Dinner

「今日が人生最後の日だったら」
ーそんなことを考えたことがありますか？

人生最後の日、「死」を迎える日のことを話題にすることは、自分のことであっても、また家族など親しい人のことであっても、多くの人にとってあまり身近なことではないかもしれません。あえて食事をしながら世代や職業や国籍や宗教など、立場に関係なく、語らう場を提供します。

死に対する考え方は様々ですが、自分の人生の終わりについてじっくり考えたり、他の人が死というものをどう捉えているのかを聞いたりする、そんな時間を時々意識的に設けてみませんか。

**◆参加者の声**

- 専門的な話ではなく、個人の経験や感覚から「死」について話していくことって、とても大切なことに気づかせてくれます。
  そして自分自身の生きることがもっと浮き彫りになっていくように思いました。
- いつも心に蓋をしていたことを思い出し、静かな時間を共有することできました。
- 全く知らない方とであれば正直に話ができてよかったと思います。

※2019 年度開催実績：3 回

## 折れない心を育てる

# いのちの授業 - OKプロジェクト

人はなぜ、頭では「よくない」とわかっているのに、大事な何かを傷つけてしまうのでしょうか？

苦しくて仕方がないとき、自分や他者を傷つけてしまうことがあります。どうすれば、苦しくても、傷つけずにこれからを生きて行くことができるのでしょうか？そして、**誰かが目の前で苦しんでいるとき、あなたに何ができるでしょうか？**

このような問いで始まる「折れない心を育てるいのちの授業」は、ただ単に、いのちの大切さを頭で理解するためのものではありません。

決して平坦ではないこれからの人生を生きて行く**私たち一人ひとりが、解決困難な苦しみを抱えたときに、具体的な行動として何ができるか、それぞれの立場で感じ、考える授業**です。

**「折れない（O）心（K）を育てる いのちの授業」**の実施をひとつの入り口として、皆で考え、実践し、育てていくプロジェクト、 OKプロジェクトをご紹介いたします。

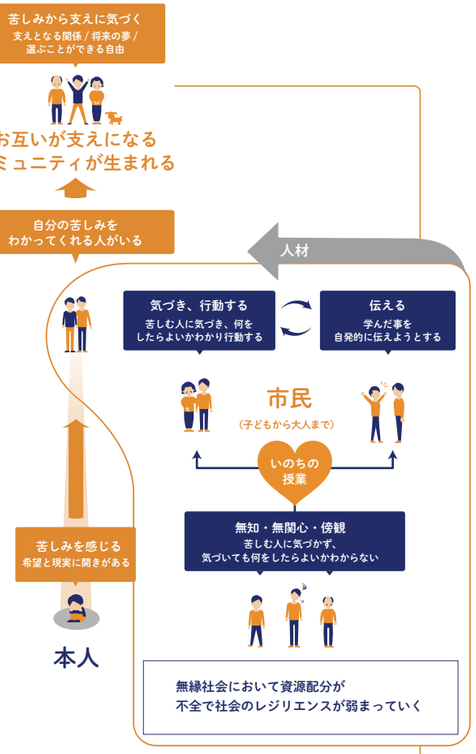
### プロジェクトの目的

**実現したい社会**

超高齢少子多死時代において、たとえ社会資源が限られていても
すべての人が人生の最期まで穏やかに暮らせる持続可能な社会

**長期成果・ビジョン**

苦しみがありながら穏やかな（レジリエントな）文化を創造する




### 監 修

**小澤 竹俊**

エンドオブライフ・ケア協会代表理事、在宅緩和ケア医。看取りの現場で学んできたことを、今を生きる子どもたちに伝えたいと、2000年から学校現場で「いのちの授業」をゲストティーチャーとして計600回以上実施。

著書『なぜいのちは大切なのか』は、中学校入試問題にて採用多数。子どもから大人まで、共通言語として、苦しみとの向き合い方を伝えている。

2017年『プロフェッショナル～仕事の流儀～』出演。

## OKプロジェクトとは

「折れない（O）心（K）を育てる いのちの授業プロジェクト」は、自分を認め大切に思う気持ちを育むことで、相手をそのまま受け入れ大切にする気持ちを育む－"I'm OK. You're OK." － 精神療法のひとつである、交流分析の考え方になぞらえています。様々な困難に遭遇する人生において、子どもたちが、そして関わる大人たちが、自分の苦しみと向き合えること。さらに、相手の苦しみと関わることができること。

地域の中で、子どもから高齢者まで、このような人が増えていくことで、これからの人口減少時代、様々な苦しみに直面しても、人生の最期まで穏やかに暮らせる、持続可能な社会を実現したいと考えています。それぞれの立場で一緒に実現しませんか。

### プロジェクトの実績

| 折れない心を育てる いのちの授業の受講者数 | 折れない心を育てる いのちの授業 認定講師数 |
|---|---|
| **8,696 人** | **53 人** |
| 2020年3月31日 現在の実績（2019年以降） | 2020年3月31日 現在の実績 |



### いのちの授業がめざすこと

様々な困難に遭遇する人生において

**自分の苦しみと向き合えること**

**目の前で苦しんでいる人に関われること**

これらの実践を通して、自尊感情・自己肯定感を育む

- ◆ 解決困難な苦しみ
- ◆ 励ましが通じない
- ◆ 自分が誰からも必要とされていないと感じる

- ◆ 苦しみから支えに気づく
- ◆ 苦しむ人を前に私にできることがある
- ◆ 自分を認め、大切にする

## 「折れない心を育てる いのちの授業」標準カリキュラム　- 45分×2コマの例 -

**◆レッスン1：苦しみから支えに気づく**

- なぜ人は自分や他者を傷つけるのか？
- 解決できる苦しみと解決できない苦しみ
- 支えとなる関係、選ぶことができる自由、将来の夢

**◆レッスン2：苦しむ人を前にしてわたしにできること**

- わかってくれる人がいるとうれしい
- 聴くこと（反復）

**◆レッスン3：自分を認め大切にする**

- どんなときに、自分を認め自分のことを大切に思えるか
- 自分が、だれからも必要とされていないと感じる苦しみ
- Nanaさんの詩（病がくれた勇気/カラー）

スライドを使った講義をベースに、ワークシートを用いた個人ワーク、考えを話し合うグループワークを盛り込み、自分ごととして捉えやすい構成にしています。

子どもから大人まで、それぞれの立場で
ご覧いただける動画も教材としています。

**動画制作者より**

便利なものがある程度そろった今だからこそ、心の平穏を求める人が増えていると感じています。自分の死や、親の死、苦しみとどう向き合うか、苦しんでいる人をどう支えられるか、そんな考えもしなかったことから、人生の大事なことを知りました。今は協会のポスターや、いのちの授業の教材ムービーなどをお手伝いさせていただいております。奥深いメッセージですが、少しでもわかりやすく魅力的に伝わるよう、お力添えできましたら光栄です。

**電通 新！ソーシャル・デザイン・エンジン様**

動画「こころの声を聴いて」
中学生の男子と、両親のお話。

「病がくれた勇気／カラー」
闘病を通して学んだことを詩に託した女性のお話。

## いのちの授業を開催した学校等（2019年以降）

**小学校**

大和村立大棚小 / 西尾市立萩原小 / 鹿児島市立喜入小 / 私立横須賀学院小 / 台東区立台東育英小 / 金武町立金武小 / 横浜市立桂小 / 葛飾区立陵南小 / 私立敬愛小 / 北区立袋小 / 唐津市立玉島小 / 唐津市立平原小 / 唐津市立浜崎小 / 会津若松市立城北小 / 四日市市立県小 / 私立城星学園小 / 阿南市立津乃峰小 / 四日市市立橋北小 / 志免町立志免西小

**高校・専門学校・大学**

帯広北高サッカー部 / 都立南多摩看護専門学校 / 神奈川県立衛生看護専門学校 / 城西国際大 / 四条畷学園大学 / 昭和大学医学部 / 慈恵医大病院 / 星槎道都大学社会福祉部 / 琉球大学 / 埼玉大学教育学部 / 琉球大学医学部

**中学校**

鹿児島市立喜入中 / 横浜市立万騎が原中 / 会津若松市立第二中 / 横須賀市立武山中 PTA 役員 / 平塚市立浜岳中 / 奈良市立京西中 / 中之条市立中之条中 / 中之条市立六合中 / 私立学芸大学附属世田谷中学校 / 志免町立志免東中

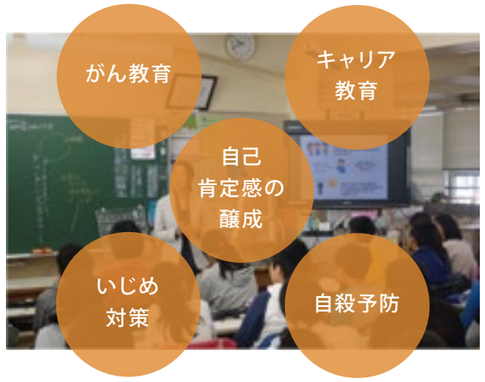
**学校以外**

増上寺 / 證大寺 / 正覚寺 / 信州大学医学部保健学科同窓会 / 子育て支援情報センターりんく / ライフサークル国分 / 稚内地域南ブロック地域役員 / 4S キッズ / 住宅型有料老人ホーム musubi / GOJYU ゼミ / 三津浜児童クラブ / 瀬戸内町学校保健会 / 奄美市学校保健研究会 / イエズスの聖心病院 / 普天間 3 区自治会 / 宜野湾市社会福祉協議会 / こどもの居場所 美ら団子 / もとぶつなぐまちづくりカフェ

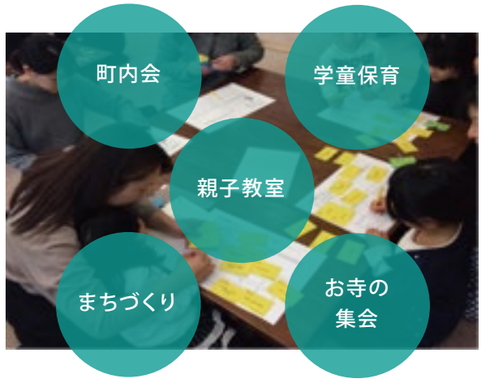
## 授業の対象と実施形態

・学校（小中高、専門学校、大学など）や地域コミュニティにおいて、様々な形態で実施することが可能です。
・小学校高学年以上を主な対象としていますが、普遍的なテーマであるため、保護者や教員など、大人も一緒に学ぶことをお勧めします。
・開催をご希望の際には、お近くの講師、または不定期で開催している講師養成講座をご紹介いたします。

### 学校で




### 地域コミュニティで




## ◆参加者の声

・私は自信のない自分がきらいでした。でも今日の先生の話を聞いて、少し自分に自信がついたような感じがしました。（中学校1年生）

・みんなはできる子、自分はできない子、そう言い聞かせて、自ら心を閉ざすこともあったが、そうではないことに気づくことができました。（中学校1年生）

・今、教室にこられるのは、母が僕のことを分かってくれて、聞いてくれる人だったからです。僕にとって一筋の光だったと思います。今度は僕の番です。（中学校年3生）

・解決できる、できないに関わらず、苦しんでいる人を支えることがしたいです。また、苦しんでいる人だけではなく、学校でなやんでいる人がいれば、今回習った「反復」という方法を使って、なやみを聞いてあげたいと思います。（小学校5年生）

・生きていていいのかと思うことがあるので学んだことをいかしていきたいです。（小学校6年生）

・人から見て苦しそうに見えても、本人にしかわからないものだと気づきました。学校、子ども達、大人にも改めて、どんどん教えて欲しいと思います。（保護者）

## ◆認定講師の声

「子どもとのコミュニケーションを見直すきっかけになった」という受講したお母様の言葉は嬉しかったです。

相手の苦しみに気づき、その苦しみを全てわかることができなくても相手からみてわかってくれる人になることは、子どもはもちろん、親や教師を勇気づけるのではないかと思います。多くの人に伝えてゆきたいと思います。

**奈良県 元看護師・教員　久保田 千代美 様**

この授業の魅力は、子どもだけでなく地域・学校と共に考えることが出来る内容であることです。

今までにない繋がりが授業を通じて生まれることで、「地域の一員として出来ること」が見えてくることにやりがいを感じることがきっとできると思います！

**鹿児島県 医師　濱田 努 様**

講師になって、自分の苦しみに向き合えるようになりました。子ども達の苦しみにも向き合い、どんなあなたでも好きだよと伝えられるようになりました。家庭内での会話と笑顔が増えました。この小さな変化が我が家以外でも起きたらいいな。自分が伝えることでみんなの笑顔につながるなら、こんな素敵なことってないんじゃないかなぁ。

**愛知県 看護師　中嶋 順子 様**



## 学ぶ機会をつくる「コーディネーター」と いのちの授業を伝えていく「講師」の2つの参加方法があります。

＼ 伝えたい ／

### 講師

・講師として対象者に伝える
・サポート役として実施支援
・次回に向けた振り返り
・地域ELC学習会への参加と継続学習

＼ 学ぶ機会をつくりたい ／

### コーディネーター

・プログラム紹介
・企画／運営
・実施報告
・広報

講師希望者
登録はこちら

講師トレーニングを受講 → 講師認定評価に向けて練習（自己練習 → 身近な人への授業）→ 評価者への授業実施 → レベル1講師認定 → 本番授業 / 継続学習

## 講師養成講座

「折れない心を育てる　いのちの授業」を自分でも伝えてみたい方のために、エンドオブライフ・ケア協会の主催する講師トレーニングをご用意しております。受講後、模擬授業を実施の上、一定の基準を満たしていただいた方に、レベル1認定講師として、正式に授業を実施していただく流れとなります。

8月11日には第1回目のトレーニングを開催し、全国から140名の方が集まりました。講師トレーニングの様子は、2019年8月29日朝日新聞夕刊ならびにデジタル版に掲載いただきました。

（#withyou ～きみとともに～）
大丈夫、支えはあるよ
横浜の医師「いのちの授業」２０年（有料記事）

2019年度は、横浜市のほか、北海道帯広市、大阪府で講師トレーニングを開催しました。今後も継続的に開催して参ります。

## ◆支援者からのメッセージ

社会課題を自分事として捉え、起業家の元で解決に向けて試行錯誤し社会へ貢献するNECの「社会起業家共創プロジェクト」の一環として、エンドオブライフ・ケア協会の活動改善に関わらせていただきました。いのちの授業への参加や毎週の打ち合わせを通して、エンドオブライフ・ケア協会の皆様が社会課題に対して強い想いを持ち精力的に活動されていること、活動を広げるために「講師の育成」「授業開催機会の獲得」「講師や受講者のコミュニティ形成」に苦心されていることを肌身で感じ、共に改善検討させていただきました。改善案のいくつかは実現に向けて取り組みが始まっています。

エンドオブライフ・ケア協会の活動が全国に広がることに貢献できたことを嬉しく思うとともに、すべての人が苦しみと向き合いながらも穏やかに暮らせる社会の実現に向け、全国に活動が浸透するよう応援しております。

**NEC 社会起業家共創**
**プロジェクトメンバーの皆様**

SVP TOKYO

SVP東京は、社会的な課題の解決に取り組む革新的な事業に対して、資金の提供と、パートナーによる経営支援を行っています。私達は、ELCを強く共感する“仲間”として、2018年10月から「折れない心を育てる いのちの授業」プロジェクト（OKP）の加速、ELCの組織基盤強化、異なる分野の専門家等の紹介などを行ってきました。

特にこの1年は、OKPに注力し、他の団体の方々とも連携し、オンライン開催や全国の講師育成の仕組みをつくりました。ELCと共に「苦しみがありながら穏やかに過ごせる社会」の実現を目指しています。

**特定非営利活動法人**
**ソーシャルベンチャー・パートナーズ**
**東京（SVP 東京）様**

# エンドオブライフ・ケア協会の歩み

## 2016年度：コミュニティの芽生え

**4月　エンドオブライフ・ケア協会設立1周年シンポジウム開催（日比谷）**

7月　日本NPOセンター+電通共同企画ソーシャルポスター展採択

**8月　新たな学習手段としてeラーニングで養成講座を提供開始**

9月　特定非営利活動法人ETIC.社会起業塾イニシアティブ2016
NTTドコモ社会起業塾第1期生として選出される以降1年半にわたり起業塾生として活動に参加。横須賀市医師会からの委託により、横須賀市近隣の医療・介護職約100人を対象として、エンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座受講者をインハウス研修として実施。このとき、全受講者数が1,000人を突破

10月　ディグニティセラピー ワークショップ（横浜）開催

**11月　地域学習会開催プログラム提供開始**
**およびELCファシリテーター・オーガナイザー認定開始**

2月　市民公開講座「人生の終わり、一緒に考えませんか」開催（虎ノ門）
NTTドコモ・イノベーションビレッジにて、40-50代働く世代対象
イベントを開催（六本木）、以降シリーズ開催

3月　NHK「プロフェッショナル～仕事の流儀～」にて取り組みが放映される

## 2015年度：組織の誕生と援助者個人への種蒔き

**4月　一般社団法人エンドオブライフ・ケア協会設立**

**6月　エンドオブライフ・ケア協会設立記念シンポジウム開催（日比谷）**

**7月　第1回エンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座を開催（浅草橋）**

10月　ディグニティセラピー ワークショップ開催、以降 年1回開催

11月　NHK「おはよう日本」にて取り組みが放映される

1月　朝日新聞Be「フロントランナー」にて取り組みが放映される

## 2013～2014年

発起人の一人である小澤が
人生の最終段階に関わる人材育成を開始

## 2017年度：企業（働く世代）への　展開・支援者の増加

**4月　エンドオブライフ・ケア協会設立2周年シン　ポジウム開催（虎ノ門）**

6月　三菱UFJリサーチ&コンサルティングソーシャル　ビジネス支援
プログラム 共感賞受賞

8月　ドクター和の <命の終わりを明るく考える　トークカフェ>
「尊厳死／安楽死／平穏死世界の終末期事情　からエンドオブライフ・ケア
を考える」開催（日比谷）

9月　書籍「死を前にした人にあなたは何ができ　ますか？」発刊、増刷
エンドオブライフ・ケア 援助者養成基礎講座　の受講者数が2,000人を突破

**11月　FITチャリティ・ラン2017支援先団体として　選出される**
**企業向けeラーニング**
**「プロジェクトマネジメントで考える親の介　護」シリーズ提供開始**

1月　Death Over Dinner開催（芝浦）
**JAMMINとの1週間コラボチャリティキャン　ペーン実施**

## 2018年度：支援者とともにつくる　「いのちの授業」

**4月　エンドオブライフ・ケア協会設立3周年シン　ポジウム開催（虎ノ門）**

みずほ情報総研「平成29年度 厚生労働省　老人保健健康増進等事業エ
ンドオブライフ・ケアの現状に関する 調査　研究」の実施に協力

**6月　「折れない心を育てる いのちの授業」プロ　ジェクト開始**
**二枚目の名刺サポートプロジェクトとの協　働開始**
企業向け研修（仕事と親の介護の両立）の　定期開催開始

8月　認定ELCファシリテーター向けスキルアップ　トレーニング開催（横浜）

**9月　SVP東京から投資・協働先として採択、2年間　の協働開始**

**11月　認定ELC講師による「いのちの授業」が各地　で開催開始**

3月　Death Over Dinner開催（銀座）、以 降シ　リーズ開催
テレビ朝日「報道ステーション」にて取り組　みが放映される

## 2019年度：地域で広がるOKプロジェクト

**4月　エンドオブライフ・ケア協会設立4周年シンポジウム開催（千代田区）**

NHK「日曜討論」（"2人に1人"の時代 がんとどう生きる）にて取り組みが放映される

7月　イベント「日米の人生の最期から学ぶ答えのない問いとの向き合い方
～"コミュニケーション"は誰のため？～」（白井敬祐先生・本間正人先生との対談）

**8月　「折れない心を育てる いのちの授業」 講師トレーニング開催（横浜市）**

朝日新聞朝刊にて取り組みが紹介される

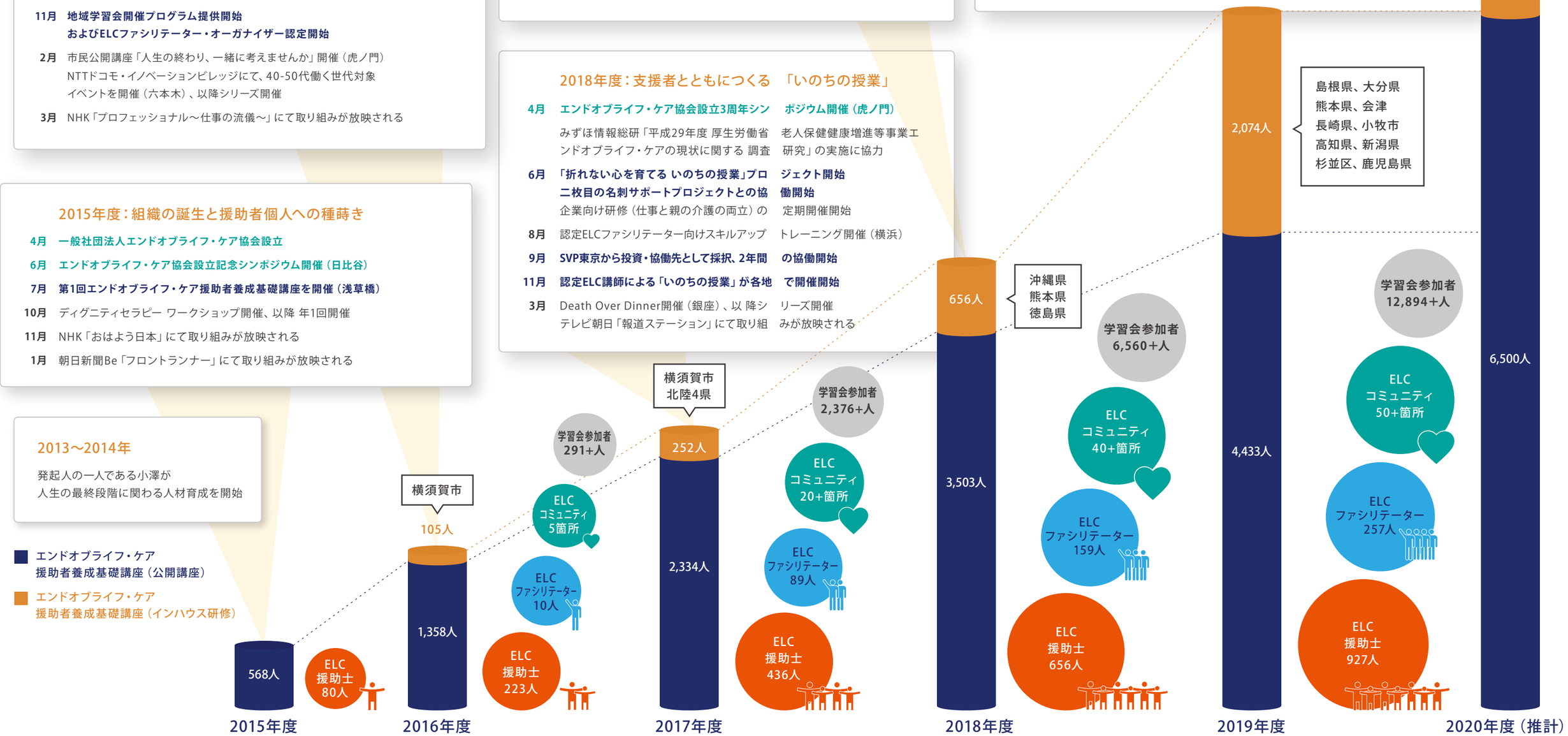
書籍「折れない心を育てる いのちの授業」発刊

**9月　NEC共創プロジェクトの対象団体として4ヶ月間のプロジェクト開始**

10月　SVP東京投資・協働先として2年目継続

11月　イベント「人生の最終段階を本質的に見つめる」ワークショップ
（エッセンシャル・マネジメント・スクール　西條健央先生、本間正人先生との対談）

12月　書籍「死を前にした人に向き合う心を育てる本」発刊




※養成講座の受講者数には右記を含む：リピーター、e ラーニング + 集合研修受講者、ファシリテーター候補者枠。その他、協会設立前の JSP 講座として 120 人が受講。
※講演や単発のイベントを含まず。
※地域学習会参加者数は、集計方法を変更したため、昨年度掲載の数字から変更あり。

# このテーマにご関心をお寄せくださる皆さまへ

エンドオブライフ・ケア協会の活動は、人生の最終段階に対応できる医療・介護向けの研修にとどまるものではなく、持続可能なまちづくり（地域共生社会）に向けた活動です。超高齢少子多死社会における課題は、1つの団体や組織で解決できるものではありません。お互いに知恵を出し合い、協働しながら進めていくものと考えています。主に以下の方法で活動に参画いただけます。詳細はお問い合わせください。

### 知る

人生の最終段階とそのケアについて

書籍や実践者のコラムを通して、社会課題と解決のアプローチをまずは知ることができます。

### 会員になる

会員制度について

メールマガジン（当協会の活動報告等）の定期受信や割引対象となる講座を安価に受講することができます。

### 応援する

Facebookとキャンペーン

当協会のFacebook公式ページのフォローやシェアを通してお友達へのご紹介をお願いします。

### 詳しく学ぶ

エンドオブライフ・ケア
援助者養成基礎

エンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座等、「わかる」だけでなく「できる」ことを目指し受講いただけます。

### 寄付する

協賛・寄付について

活動にご賛同くださる個人や法人の皆さまにおかれましては、協賛・寄付・遺贈についてご連絡をいただけますと幸いです。

### 自分で教える

地域学習
会開催支援プログラム

所属組織や地域で講師として教えたり、学び続ける場をつくる「地域学習会開催プログラム」をご利用いただけます。

### 講師を呼ぶ

講演のご依頼

解決困難な苦しみを抱えた人への援助をはじめ、地域や学校、法人での講演やワークショップなどの企画に講師派遣をご依頼いただけます。

### ディグニティセラピーを行う

尊厳を守る援助
ディグニティセラピーについて

人生の最終段階を迎えた、その人の“尊厳”を守るケア、「ディグニティセラピー」を学んだり、実践することができます。

### 買う

書籍やグッズ

チャリティつきのグッズ購入を通して、活動にご協力いただけますと幸いです。



## ◆研究者の皆さま

私どもの活動の成果が世の中に発信されていくことは、まだこのテーマが届いていない多くの方々にお届けする大変貴重な機会となります。研究者の方も、ご協力くださる方も、ご連絡お待ちしております。

エンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座の効果として、研修前後で受講者が実際に援助を言葉にできたか、また患者さんやご家族の視点から研修の効果があったかについて、複数の大学に所属する研究者が、協会とは別に独立した立場で調査をしております。

中間報告としては、受講後に援助を言葉にできた実態をとらえることができ、効果の一部が確認できました。今後さらに研究を重ねご報告したく進めております。本研究にご協力頂ける方がいらっしゃいましたら、是非ご連絡をお願い申し上げます。

WELL Study
北里大学医学部医学教育研究部門
千葉 宏毅 様
chibah@med.kitasato-u.ac.jp

## ◆支援者の皆さま

ELC協会の小澤先生、千田さんとは、2016年に弊団体のプログラムにご参加いただいてからのご縁となります。

お会いした時から変わらない情熱を持ち、どうすれば社会が変わるのかを常に本気で考えられていること、またそこに日々多くの仲間を巻き込み、力強い流れとなって前進されているお姿を見ては素晴らしいなぁといつも思っています。よりよい社会の実現に向けて、今後もまたご一緒させていただけることを心より楽しみにしております。

NPO 法人 ETIC.
コーディネーター　猿渡 由実子 様

この2年間、受講生およびデザイナーとして関わらせていただき、エンドオブライフ・ケア協会が広げようとしているメソッドが、社会に本当に必要なものだと確信しています。この困難な社会を乗り越えていくためにも、一人でも多く、少しでも速くこのメソッドが伝わっていく必要があります。本パンフレットを手に取っている皆様一人ひとりにとっても、社会を良い方向にデザインできる機会がここにあります。共に「仲間」として、この活動を支え、実践していきましょう。

日本医療デザインセンター
代表理事　桑畑 健 様

## ◆メディアの皆さま

当協会の活動は、解決が困難な苦しみとの向き合い方と捉えたときに、子どもから高齢者まで、様々な人が対象となります。生産年齢人口の割合が減っていくこれからの時代、地域共生社会に欠かせない、レジリエンスを育む活動です。避けることのできない大きな社会課題について、一人ひとりが自分ごととして考えることができますように、ともに発信していきませんか。

ELCの活動は高齢者への対応にとどまらず、自らや大切な人の最期を学ばせてもらう機会なのだと、取材の際に知りました。普段はさほど意識しない「死」や「苦しみ」について学ぶことは、どう生きるかを考えること。とはいえ、時にしんどくなる話題です。だからこそ志を共にする仲間とも出会える協会は貴重です。

朝日新聞東京本社教育総合本部
EduA 編集部　上野 創 様

## ◆企業（人事・CSRご担当など）の皆さま

今後企業では、親の介護が急に始まり、相談できずに仕事を辞める人が増えて行くことが予想されています。一方で、家族の病気や介護や死別などを経験したことから、誰かの力になりたいと願い、その力を企業の中でも発揮していく人が増えていくかもしれません。会社のリスクマネジメントとして、さらには CSR 活動の 1 つとして、エンドオブライフ・ケア協会を活用してみませんか。親の介護と仕事の両立についての研修会や、「折れない心を育てる いのちの授業」など、対象とニーズに合わせた講演・ワークショップを提供いたします。苦しみを抱えた人に向き合う姿勢を学ぶことで、企業のレジリエンスの向上や、チームワークの育成にもお役立ていただけます。

社内起業家向けの新規事業創出のプログラム運営をしておりますが、その中で社会課題解決型の事業の模索を行っており、ご協力をいただいております。超高齢化社会の課題や個人レベルではいつかは終わりを迎える人生をどう自分らしく過ごすかなど、課題を踏まえつつも前向きに向き合い、楽しめる社会が創れるかにアイデアをいただいております。

株式会社 NTT ドコモ
イノベーション統括部　担当部長　笹原 優子 様

## ◆行政の皆さま

地域包括ケアシステムを実際にそれぞれの地域で展開するためには、地域で“最期まで”関われる体制づくりと看取りを具体的に学ぶことが必要になります。当協会のご提供するエンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座は、関わり方が「わかる」だけではなく、具体的に「できる」ようになる研修です。また、地域で学習会を開催できるファシリテーターが全国にいます。地域包括ケアシステムの具体的な各論を学ぶ場づくりをご支援いたします。

# 各種ご支援

## ◆協賛

当協会の活動に対し、その専門性を通じてご支援いただいた法人です。

・特定非営利活動法人ETIC.（社会起業塾イニシアティブ2016）
・NTTドコモ/NTTドコモ・ベンチャーズ
（Villageソーシャル・アントレプレナー第1期生）
・株式会社電通
（日本NPOセンター＋電通共同企画ソーシャルポスター展）
・Well Study
・フィッシュ・ファミリー財団 JWLI
（The Japanese Women's Leadership Initiative）
・FIT チャリティ・ラン
（英名：Financial Industry in Tokyo For Charity Run）2017 実行委員会
・一般社団法人セオリー・オブ・チェンジ・ジャパン
・JAMMIN合同会社
・特定非営利活動法人 二枚目の名刺（NPOサポートプロジェクト）
・特定非営利活動法人ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京
（SVP東京）
・一般社団法人 日本医療デザインセンター
・日本電気株式会社（NEC社会起業家共創プロジェクト）

## 事例1　ファッションを通した社会貢献：チャリティキャンペーンとイメージ映像の制作

京都で活動するJAMMIN合同会社は社会課題の解決に取り組む団体を週替わりで紹介し、その活動メッセージを込めたオリジナルデザインのTシャツ等 制作・販売しています。

この活動を通し、社会的に重要でありながら必ずしも認知度が高くはない課題の存在や、その解決に向けてアクションを起こしている人がいることを広く知ってもらうことをめざしています。

当協会の活動やめざしていることを詳しくインタビューいただいた他、その過程を通じて、オリジナルTシャツ等を制作いただきました。1点につき700円のチャリティ金をお預かりし、2008年のキャンペーン終了時に総額61万円となりました。

### デザインコンセプト

一人ひとりの命は、大きな円（縁）の中に、生かされている―。

エンドオブライフ・ケア協会のシンボルマークであるたんぽぽをはじめ、アラセイトウ（花言葉は"思いやり""見つめる未来"）、スイートピー（花言葉は"やさしい思い出""門出"）、サンザシ（花言葉は"希望""新しい光"）で、繊細かつ力強い円を描き、困難の中にあっても「つながり」を感じ、折れない心で生きる人間の姿を表現しました。

"IN LIFE, WE ARE ONE"、「私たちはひとつ」というメッセージを添えています。

### ◆チャリティ金の使途：動画「私の人生」

グッズをご購入くださったみなさまからお預かりしたチャリティ金を活用させていただき、私たちがお伝えしたいメッセージを短編の映像として制作いたしました。

https://youtu.be/CUnn4fwYp08

## 事例2　複雑で近寄りがたいテーマをより身近に：ソーシャルポスターと教材映像の制作

複雑な社会課題とその解決に取り組む団体の活動内容を表現する試みとして、電通有志のクリエイターの方々にポスターを制作いただき、作品は世界三大広告賞のうち2つにおいて、3つの賞を受賞されました。また、「いのちの授業」で、使用する動画を制作いただきました。

## ◆受賞・評価

当協会が取り組む社会課題の重要性を含めて以下の形で評価を頂きました。

・三菱東京UFJリサーチ＆コンサルティング ソーシャルビジネス支援 プログラム 共感賞受賞
・カンヌライオンズ国際クリエイティブフェスティバルにて、電通制作のソーシャルポスターが、Shortlist（ファイナリスト）受賞。また、One Show（カンヌライオンズと同じく世界三大広告賞のひとつ）2部門でMERIT（入選）を受賞
・パブリックリソース財団 Value Makerサイトの寄付的確性評価（格付け）において、★3つを獲得し、寄付対象団体として掲載



# 法人概要

| | | |
|---|---|---|
| ◆設立 | 2015年4月21日 | |
| ◆所在地 | 東京都港区虎ノ門3-17-1 TOKYUREIT虎ノ門ビル6F | |
| ◆メンバー | 代表理事 | 小澤 竹俊（めぐみ在宅クリニック院長） |
| | 理事 | 小野沢 滋（みその生活支援クリニック院長） |
| | 理事 | 長尾 和宏（長尾クリニック院長） |
| | 業務執行理事 | 千田 恵子 |
| | 顧問 | 柏木 哲夫（淀川キリスト教病院理事長） |
| | | 武見 敬三（参議院議員自民党国際保健医療戦略特命委員会委員長） |
| | | 野中 博（医療法人社団博腎会野中医院院長、前東京都医師会会長） |
| | 相談役 | 西川 満則（国立長寿医療研究センター 緩和ケア診療部、在宅連携医療部） |
| ◆設立時賛同者 | 149名 | |
| ◆会員 | 2,837名（2020年3月末現在） | |

## ◆シンボルマーク

エンドオブライフ・ケア協会のシンボルマークは、たんぽぽの綿毛が飛び立っていく光景をイメージしています。たんぽぽは、ひとつの種から花が咲き、多くの種を実らせて、綿毛となって飛び立ち、どんなに固い地面にも根を生やして、咲き広がっていく、まさに生命の円環と繁栄を象徴する花といえます。

私たちエンドオブライフ・ケア協会は、人生の最終段階に対応できるリーダーを全国各地へと送り出し、そのリーダーたちが、そこに根をおろし、地域を支える多くの人材を育てていくようになってほしいとの願いを、このシンボルマークに込めました。

## ◆シンボルカラー

エンドオブライフ・ケア協会のシンボルカラーは、オレンジから濃紺へのグラデーションです。日の出や日の入りなど、昼と夜が入れ替わるとき、水平線から大空にかけて、この美しいグラデーションをみることができます。

当協会は、人生の最終段階を、生と死の境、「人生の渚」と称し、人の一生の中でとても大切な時期であると捉え、このグラデーションをシンボルカラーとしました。シンボルマークとあわせて、皆さまに親しんでいただければと思います。

一般社団法人
エンドオブライフ・ケア協会
End-of-Life Care Association of Japan

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、世界はきわめて厳しい困難に遭遇しています。緊急事態宣言の中、経済活動も制限され、日常の生活は一変しました。どれほど努力しても解決が難しい苦しみと向き合わないといけません。

エンドオブライフ・ケア協会の活動は、この解決が難しい苦しみを抱えた人が、穏やかに過ごせる援助を、「エンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座」として展開してきました。

2015 年より活動を開始し、2 日間研修の受講生は 6,500 人を超え、全国で地域学習会が 50 カ所以上で企画され、認定ファシリテーターは 260 名となりました。

そして、医療・介護の枠を超え、「折れない心を育てるいのちの授業プロジェクト」として発展し、認定講師は 50 名を超えるまでになりました。

この困難にあって、それぞれの地域で、苦しむ人と誠実に関われる担い手が増えていくことを、エンドオブライフ・ケア協会として応援しています。これからも、皆さまとともに、この活動の輪をさらに広げていきたいと思います。皆さま、よろしくお願いいたします。

**一般社団法人エンドオブライフ・ケア協会　代表理事**
**めぐみ在宅クリニック　院長**
**小澤 竹俊**